

●シリーズ企画(6~12回)にふさわしい文化情報をお寄せください。

●ご紹介している人物・建物・事象などは、すべて取材当時のままで掲載しています。(敬称略)

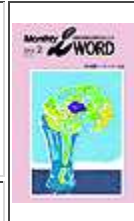
[次号へ](#)[前号へ](#)[メニューはこちら](#)

2002年2月 通巻248号掲載

北の記念碑 14

雪まつり発祥の地碑

小樽市梅ヶ枝町



第53回さっぽろ雪まつりは、2月5日から開催されます。この雪まつりの15年前から、子どもたちや父母等の協力で雪まつりを楽しんでいたのが小樽市立北手宮小学校です。

それが、いまや世界の祭典として知られる北海道の雪まつりの発祥です。

美しい雪をまつらう子どもたちの たくましい姿に未来を託した校長先生の情熱

前札幌市長の板垣武四さん(故人)が、札幌市経済部長と札幌観光協会常務理事を兼務していた1950(昭和25)年に、第1回さっぽろ雪まつりを立ち上げたときの思い出を述べたエッセーがあります。そのなかに「当時の札幌はまだ敗戦のショックが色濃く残っており、食糧や燃料の不足な時だった。市全体の暗いムードを吹き飛ばし、少しでも明るい感じにもっていくためにはどうしたらよいか、それが市政の課題ともいえる時代だった。そんなころ、映画館で見たニュースに、小樽あたりの子どもが校庭の雪を固めてナタやノコギリで刻んで小雪像をつくっているものがあった。私が学んだ札幌一中(現札幌南高等学校)の雪戦会と雪像を結びつけたらどうだろう。これが雪まつりの私の発想の原点だった」と語っています。

札幌観光協会内部でも、戦後の不況、人心の混乱に加えて、青少年の犯罪が多いため、若者たちのエネルギーを発揮する場所をつくる必要があるという話になり、「小樽市手宮の雪像を思い出し、あれの大掛かりなものをやろうということになった」、それが札幌雪まつり創設の起因となったのです。

そこで語られた「小樽の雪像」とは、北手宮小学校で今日までつづいている「雪まつり」のことです。

1935(昭和10)年2月、第二代校長の高山喜市郎さんは「永いあいだ雪に閉ざされる北国の冬に、美しい雪を友として親しむことができれば…」との発想で雪まつりを開催しました。そのときの様子は『おたる歴史ものがたり』(水口忠著)に、当時小学生だった米田礼子さんの思い出として詳しく綴られています。

「冬休みを終えると、放課後、先生と生徒は校庭に飛びだし、天からの恵みである雪に立ち向かう。ノコ、そり、スコップ、はしごが用意され、雪踏み、雪切り、雪運びの作業がつづきます。そして達磨大師、文福茶釜、唐獅子などが築かれました。作業は1カ月近くつづき、吹雪になったり、長靴に雪が入り、手足のひび割れやしもやけは毎度のことでした。お母さんたちも手袋や防寒着にいろいろな工夫をしてくれ、毎日少しずつ高くなるのができるのがとてもうれしかった」と述べています。そして、「雪まつりの日は、いつも天気が良かった。青く高く晴れ上がった大空に、真っ白く輝く雪像がくっきりと映え、台座の上に数人の代表が立ち、来賓、父母、全校児童の拍手のなかで除

幕式が行われた。晴れがましさのなかに、何か大きなものに抱かれた敬虔な気持ちになったものである」と結んでいます。

高山校長は在職中に小樽市議会議員を務め、退職後は市教育委員長、さくら学園初代園長として心身障害児の教育にも尽力した人です。

雪国の人づくり
雪ふる中を
息はずませ頬赤くそめ
子等の雪まつらうすがたに
たゞたのもしく いぢらしく思う

1980年に創立50周年記念事業の一環として建立された発祥の碑に刻まれた、自作の碑文です。